

言語的テキストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開

Teaching composition through reading multimodal texts

小林一貴*・多和田仁**

Kazutaka KOBAYASHI and Hitoshi TAWADA

1. はじめに

本稿では、意見文に引用するグラフや表についての検討と読み取りの活動を通じた学習の流れを提示するとともに、学習で用いたワークシートと書かれた意見文の検討を通して、図表を引用して書く学習について、図表の読み取り活動の位置づけについて考察する。

書くことの学習における「引用」については、基本的に別のテキストの言語表現が問題にされる。それに対して、図表の引用については書かれる文章に図表自体を取り込むとしても、それをどのように解釈し理解したのが引用の過程で問題となる。書くことの表現意図から一面的に解釈し、意図の補強として引用するだけでなく、図表それ自体のコンテキストとの関係をふまえることが学習において求められる。このような立場から授業を構想し、実践を行った。

2. 教材の考察

教材は光村図書5年「グラフや表を用いて書くこう」を用いた。理由付けや根拠を明確にして説明することを学習事項とした教材である。教科書では「くらしやすさ／にくさ」をテーマとし、考えの裏づけとなる資料を用いて書き、読み合う活動が設定されている。こうしたテーマでは、環境や安全などを題材にして定型化された意見を述べることが基本となり、またモデルとなる文章もそうした定型に沿っている。そのため、考えを書いて発表することを中心にした活動だけでは定型に沿って意見を述べるのが学習の中心となり、資料についての理解や、それをいかに引用して書くかについての学習が十

分に行えない可能性がある。資料それ自体の理解と、学習者自身にとって重要なことは何かを考えて引用し意見を発表できるような学習活動、言語活動が必要となる。そのために、どのような言語活動の提示方法が求められるか、授業での活用において留意すべき点は何かについて、教科書教材の言語活動の検討と実際の授業の分析を行う。

2-1. 学習の手引きの構造

単元のはじめには、以下のように学習の流れが示されている。

決めよう・集めよう

- 1 自分の考えをもつ。
- 2 自分の考えに合ったグラフや表を選ぶ

組み立てよう

- 3 何を、どの順序で書くか決める。

書こう

- 4 グラフや表を用いて書く。

伝えよう

- 5 書いた文章を友達と読み合おう。

(『国語 五』光村図書：149)

これらの流れに基づいて、教材では具体的に以下のような学習の手引きが示されている。

- 1 自分の考えをもとう。

わたしたちの社会は、くらしやすい方向へ向かっていると思いますか。日々のニュースや、身の回りのことなどから考えましょう。

- 2 自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう。社会生活に関わる統計資料を集め、読み取って、自分の考えをまとめましょう。

- 3 何を、どのような順序で書くか決めよう。

* 岐阜大学教育学部

** 笠松町立下羽栗小学校

次のページの例を見て、何が、どのような順序で書かれているかを確認しましょう。

例を参考にして、「自分の考え(初め)」「グラフや表の説明と、それをもとに考えたこと(中)」「まとめ(終わり)」の組立てで、何を、どの順序で書くか決めましょう。

4 グラフや表を用いて書こう。

5 書いた文章を友達と読み合おう。

友達のグラフや表の使い方、文章の構成のしかたで、説得力があるなど思ったところはありませんか。意見や感想を述べ合ひましょう。

(『国語 五』光村図書：150-153)

ここには、学習者の日常的な経験に基づく意見を、グラフや表で補強することにより、その意見を説得力のあるものにしていくという学習の流れが認められる。

1では、「わたしたちの社会は、くらしやすい方向へ向かっていると思いますか。」として、学習者の日常的な考え、感覚に基づいた意見から導入が図られている。また、「日々のニュースや、身の回りのことなどから考えましょう。」として、具体的に見聞きし、体験したことを題材として見つけていくよう促している。2は「自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう。」とあり、1で持った意見に「合う」資料を見つけて選ぶ活動である。その資料とは、「社会生活に関わる統計資料」である。3は順序、構成を考える活動であり、4と5は実際に書いて読み合う活動である。

ここで着目したいのは2の活動である。2では意見に合う資料を選ぶことを行うが、その資料については「集め、読み取って、自分の考えをまとめましょう。」と手引きにある。資料を「読み取る」学習がここで行われる。資料の読み取りに関しては、学習を行う上で「気をつけること」して次のように書かれている。

資料を、自分の考えのうらづけとするとき

- ・数字や書かれていることから、何が読み取れるのかを考える。
- ・読み取れたことから、どんなことが考えら

れるかを書き出す。

- ・資料から考えられることが、自分の考えをうらづけるものになっているかどうかを判断する。

ここでは、単に意見に合うものを選ぶのではなく、あくまでも資料を読み取ることを通して、そこから「どんなことが考えられるかを書き出す。」としている。そして、「自分の考えをうらづけるものになっているかどうかを判断する。」となっている。資料を分析的に解釈するとともに、1の意見に照らし合わせて批判的に検討することが促されている。この「気をつけること」からは、単に意見に合う資料という観点だけではなく、批判的検討による資料の理解に基づいた「グラフや表を書く」学習が想定されている。そこには、資料から読み取れることに照らし合わせて、学習者の意見のとらえ直し、言い換えれば意見を持つことの基盤となっている日常生活のとらえ直しも学習の内容に含まれてくると考えられる。そもそも、学習者の経験に基づく意見とグラフや表に示される情報との間には開きがあるのであり、グラフや表から分かることを見極めると同時に、学習者の意見、すなわちこの単元の場合の「くらしやすい社会」とはどのようなことなのか、についての認識をいかに持つかが問われることになる。

以上のように考えると、この教材に基づいて授業を行う際には、グラフや表の読み取りにとどまらず、それを批判的に検討し、意見のとらえ直しをどのような学習指導の方法によって行うかが課題となる。この課題に対して、テキストとコンテキストの「相互交渉」のモデルを検討する。

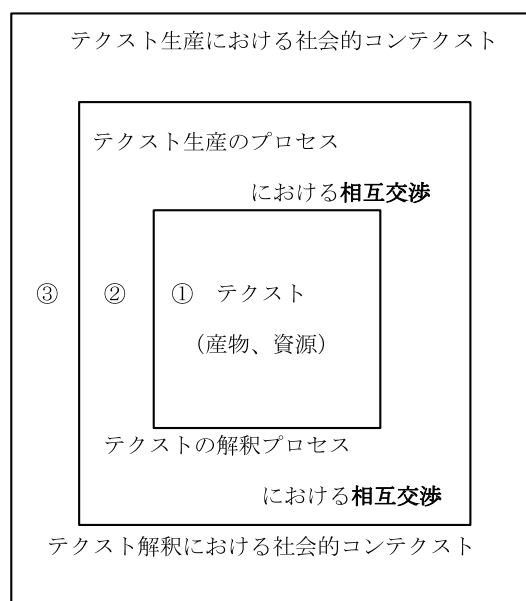
2-2. グラフの読み取りと意見を書くことの関係

グラフや表の批判的検討に基づく理解、ならびに意見のとらえ直しにおいては、言葉や図といった産出されたテキスト自体だけではなく、それが置かれた社会的文化的コンテキストとの関係から分析的に考察することが必要となる。こうした考察のためのモデルとして、批判的談

話分析に関する議論を検討する。

2-2-1. 「社会的相互交渉」の過程

奥泉 (2012) は, Fairclough (2001, 2010) におけるディスコースとテキストの「社会的相互交渉の全プロセス」に関する3つの次元の図を整理し, 次のような図に示している。



図の①～③について, 次のように説明している。

- ① 記述ステージ・・・語彙—文法的資源に関する分析, 展開の技法の分析等。
- ② 解釈ステージ・・・産物としてのディスコースと生産プロセス, あるいは解釈プロセスとの相互交渉として, ディスコースをそれらの共有資源と見なすことに関わる分析。
- ③ 説明ステージ・・・社会的コンテキストとの関係や, ディスコースの生産・解釈の過程における社会的効果等の分析。

奥泉 (2012: 28)

①の「記述ステージ」は, 「ディスコースを社会的記号過程の「産物」として, 上図の一番内側の枠組みで見た」ものであり, 「書記も口頭も含め」たものである。②「解釈ステージ」と③「説明ステージ」は, 「テキストの産出プ

ロセス」あるいは「解釈プロセス」との相互交渉との関係で, 動的に捉えたもの」とされる。「②の観点から捉えたものを「相互交渉としてのディスコース」, ③の社会的観点から②や①との関係を捉えたものを, 「コンテキストとしてのディスコース」という言い方で整理されることをふまえ, 「③は「テキストの産出プロセス」あるいは「解釈プロセス」を, 社会的慣習や秩序をも包含する社会的コンテキストとの関係も含んで観たディスコースということ」になるとしている。(奥泉 2012: 27-28)

この整理に基づき, 教科書の文章のモデル(『国語 五』: 152-153)について部分的な分析を行ってみたい。

2-2-2. モデルの文章の検討

モデルの文章では, 1行目に「社会は, ぐらしやすい方向に向かっている」と題がつけられ, 書き手の氏名が2行目に記されている。3行目からは本文が開始される。最初の段落は次のようなものである。

「わたしは, 日本の社会は, ぐらしやすい方向に向かっていると思います。なぜなら, 社会全体で, ごみを出さないようになってきているからです。さまざまな分野で, リユースやリサイクルが進んでいます。わたしの周りでも, リサイクル品を活用するなど, ごみを出さないように心がけている人がたくさんいます。」(『国語 五』: 152)

①の「記述ステージ」は学習の手引きの3「自分の考え(初め)」に相当する部分である。最初の文で考えを述べ, 続いて「なぜなら」とその理由が示されている。そして, 「わたしの周りでも」として自分の日常生活で見聞きした事柄が述べられている。②の「解釈ステージ」としては, 最初に意見が明示されることにより, 後に続くテキストの展開が予測される。その予測の一つとして, 「なぜなら, 社会全体で, ごみをださないようになってきている…」と「社会全体」における根拠を見出し, さらに「わたしの周り」という書き手の身近で具体的な視点による根拠が示されている。③の「解釈ステージ」としては, わたしに属する意見, わたしの

見聞きする事柄として書いており、「わたし」を中心として考えを述べるが行われている。このように、わたしの思考や知識を語る—それを聞く／読むという関係において意見が述べられている。これは、「わたし」はごみを減らす活動が行われている社会の一員としての意見の提示である。このような①～③の社会的相互交渉のプロセスは、続く「中」「終わり」においても維持される。「中」では、資料として選んだグラフについて、「…ことが分かります。」「…ことだと思います。」「…ことができるでしょう。」と書き手の判断や思考内容を提示する述べ方をしている。また、「終わり」の段落でも同様の特徴が認められる。

また、このモデルの文章には、中間部分に「ごみの総排出量の推移」というグラフが引用されている。このグラフは、折れ線で「一人1日あたり排出量」を、ばうグラフで日本全体の「総排出量」を示している。縦軸に排出量（「一人1日あたり」については「g」、総排出量については「万t」）、横軸は2001から2010「年」である。(①) 右肩下がりで排出量（重量）が減っていることが示されている。(②) これはあくまでも重量としての排出量が減っていることを示すものであり、ごみの重量が減るということは、文章の「初め」にあるような「リユースやリサイクル」, 「中」にあるような「小さな努力の積み重ね」に限らず、ごみの種類や材質、消費の変化等々のごみの排出量に関わる事柄もあると考えられる。このように、重量に焦点化し、それが減少するという効果が認められる。(③)

このように見てくると、「グラフや表を読み取る」こととは、ごみの排出量についてどのような事柄や情報が取捨選択され、いかなる効果を持っているのかを分析的に考察することであると考えられる。そして、「くらしやすい方向に向かっているかどうか」という意見を述べることは、こうした取捨選択のプロセスを通して行われることになる。こうしたプロセスを保障するための活動を取り入れた授業を構想し、実践を行った。

3. 授業の概要

2015年12月から2016年1月にかけて、岐阜県内の小学校5年生のクラスで6時間の授業を行った。授業者は多和田仁教諭である。用いる教材は、2.において検討した『国語 五』（光村図書）の「グラフや表を用いて書こう」である。基本的な学習の流れは2-1.に示したような手引きに準拠し、2「自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう」と3「何を、どの順序で書くか決めよう。」の間に、選択したグラフや表について批判的に理解するための話し合い活動を取り入れた。

学習の概要は次の通りである。

時間	学習の流れ	学習の段階
1	<ul style="list-style-type: none"> ・くらしやすい方向に向かっているか考える ・書く目的とその内容および書き方を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を持ち、表現する
2	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフや表から考えられることを書き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料について分析的視点を持つ。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフや表から読み取れることについて、メモをもとに話し合う。 ・構成メモを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料についての分析的検討を行う。 ・検討したことから意見につながるものを選択する。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・構成メモに基づいて文章（下書き）を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取捨選択したプロセスをふまえて文章にする
5	<ul style="list-style-type: none"> ・文章（下書き）をもとにペアで交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の読み取りをふめて、意見の位置づけを明確にする。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・完成した文章を発表する。 ・学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフや表を交えて意見を述べることについて意識化する。

2時間目で「グラフや表から考えられることを書き出す」ところでは、グラフの特徴や単位、情報の表す対象について考えるよう促した。また、3時間目には、2時間目に書き出して整理したことをふまえて、学習者の日常生活においてそのことが当てはまるのかどうかを課題として交流を行った。交流を通して日常的な感覚から選択したグラフや表の情報を検討し、意見とのつながりを考えて構成を作る活動につなげることを意図している。

4時間目から6時間目にかけて、構成から文章を書く際には、教科書の文章モデルを参考とした。基本的にテキストの表層レベルの特徴については、文章モデルの表現を用いるようにした。

グラフや表を選択にあたっては、『朝日ジュニア学習年鑑 2015』を資料として用いた。また、書く時間ごとに用いるワークシートを作成して、それに記入をしながら学習を進めた。

4. 学習の実際

2時間目に学習者が選んだグラフや表は次のようなものである。

ゴミの排出量／交通事故件数／家庭の消費額／病気の種類と割合／自動車の国内保有台数／世界のインターネットの利用者数／農作物の耕地面積／主要国の老年人口割合／医薬品の生産額

以下、ワークシートの記述ならびに書いた文章に基づいて学習の実際を検討する。

4-1. 学習者A

1時間目では、ワークシートを用いながら、(1)「社会がくらしやすい方向に向かっているかどうか」、(2)「(1)のように考える理由を、自分の体験から見つけ、箇条書きにする」の2つを考えることを行った。

ワークシート1

- (1) くらしやすい方向に向かっている
- (2) ・自動車で出るガス→エコカー等で、環境にやさしい
 - ・インターネット等で知りたいことを調べられる 便利
 - ・ガラケー→スマホ 便利
 - ・そうじ機や車→自動 便利
 - ・機械 増 便利
 - ・ゴミリサイクル
 - ・ストーブ・せんふうき等温度に合わせて、快適にくらせる

Aは、ワークシート1の(2)でインターネットや電気製品に言及しており、それをふまえて「世界のインターネットの利用者数」のグラフを選択した。2時間目で分析的視点を持ちながら資料を検討している。

ワークシート2

- (1) くらしやすい方向に向かっている
 - (2) ケータイやパソコン等の機械化で生活が便利になってきている
 - (3) 生活のなかの電気。電子製品の普及率
- ※どれくらいの電子製品がどれだけ広まっているか知ってもらうため
- ①ケータイ 2002年 78.6%
⇒2014年 93.2%
- TV 1969年 13.9%
⇒2014年 96.5%
- エアコン 1975年 17.2%
⇒2014年 90.6%
- ②TV
1969年
- ・100分の14人ぐらいにも、広まっている
 - ・ほとんどの人に広まっていない
- 2014年
- ・100分の97人ぐらいにも広まっている
 - ・ほぼ100%
- ※同じ⇒・私の知っている人の家には、必ずTVやケータイ等がある。
- ・毎日必ずTVを見ている
 - ・町中でケータイをもって歩く人がほとんど
 - ・私のおばあちゃんもケータイを持っている
- ③自分の考えをうらづけるものになっている

ワークシート2では、(2)のところで「機械化」により「便利」になってきている、との理由を述べている。また、(3)で「普及率」のグラフの意図について、「※どれくらいの電子製品がどれだけ広まっているかを知ってもらうため」としている。続けて「ケータイ」と「TV」「エアコン」について、普及率の変化を整理している。2つ目の「※」では、自身の日常生活と関連付けて、多くの家や街中でケータイを持っている人がほとんどであり、「私のおばあちゃんもケータイを持っていること」を指摘している。これらは、(3)の①に示された年代の違いによる普及率の変化についての具体的に視点がとられている。

3時間目に記入されたワークシート3は次のようになっている。

ワークシート3

- (1) ぐらしやすい方向に向かっている
 - (2) 機械や便利なものが増えてきている
 - (3) 生活のなかの電気。電子製品の普及率
 - ①何を表している・・・普及率→増⇒便利・ぐらしやすい
作られた目的・・・何がどれだけ広まっているか知ってもらうため
 - ②たてじく→パーセント(%)
横じく→電気・電子製品の種類
 - ③TV 1969年 13.9%
⇒ 2014年 96.5%
エアコン 1975年 17.2%
⇒ 2014年 90.6%
- 自分の生活と比べると・・・
- ・TVで色々な情報(ニュース等)や、みんなで楽しめる番組
 - ・パソコン・スマホ→インターネット
 - ・エアコン→快適
- (4) 電子製品→便利で快適・必要な物

ここでは、(3)において「普及率→増⇒便利・ぐらしやすい」というつながりを挙げている。また、(3)③では、「TV」と「エアコン」に焦点化し、エアコンに関して「快適」という暮らしやすさの具体的な内容を指摘している。これらをふまえて、(4)では「電子製品→便利で快適・必要なもの」とし、ワークシートの2に

はなかつた「快適」を見出している。

草稿を書いたのちに交流をし、それに続いて書かれたワークシート6では、次のような記述ながされていた。

ワークシート6

(2) ほとんどの人が、快適にすごせるような社会になってきているということが分かるけど、「ほとんど」＝「まだ、そうではない人が少しいる」ということなので、もっと増えると、もっとたくさんの人々が、より快適にすごせるのではないかと考えた。あと、作文中には、エアコンのことばかり示してあったけど、まだ50%にも達していないもの(タブレット型端末等)もあるということに気づいた。

(3) この学習で、グラフを見比べると、少しずつ違いがあることが分かった。そこで、「どうして増えたか」や、「どのようにして減ったか」等がきちんと考えられた。これから、社会等でグラフが出てくると思うので、勉強したこと、そこで分かったことを活かしたいと思った。

(2)では交流で出された点を述べている。ここでは、「ほとんど」という言い方に関して、「まだ、そうではない人が少しいる」という状況についての指摘がなされている。また、「(タブレット端末)」についての場合を視野に入れた議論についても言及されている。

最終的に書かれた意見文は次のようなものである。

意見文

「社会はぐらしやすい方向に向かっている」
私は、今の日本はぐらしやすい方向に向かっていると思います。なぜなら、色々なものが機械化し、生活が便利になってきているからです。

上のグラフは、生活の中の電子製品が、どれだけ広まっているかを示しているグラフです。このグラフが作られた目的は、どの製品がどれくらいの人に広まっているか、昔と比べてどうかを、知ってもらうためだと思います。

このグラフで注目した所は、エアコンの普及率の変化です。一九七五年は、100人中17

人しか広まっていません。夏など、暑い時期は、とても不便だったと思います。けれど、二〇一四年になると、100人中91人（ほぼ全員）も広まっています。昔と比べると、とても快適にすごせるようになったと思います。自分の生活でも、夏だけではなく、冬など、寒い時期も、だんぼうを使うことで、あたたかく、快適に過ごすことができます。だから、エアコンは、どの季節でも、快適にすごせて、とても便利だし、必要な物だと思います。

このように、電子製品が増えてきているということを述べました。これは、より快適に便利に過ごせるようになったということです。そこから、今の日本はくらしやすい方向に向かっていると考えました。

（参考）消費動向調査（内閣府）

4つの段落にまとめられているが、これは教材のモデルの文章の記述方法に沿ったものである。よって、「記述ステージ」のレベルでは2-2-2に示した特徴が見いだされる。「解釈ステージ」では、最初の段落において「機械化」をキーワードとし、基本的に「くらしやすい方向に向かっている」というテキストの議論の展開の方向性が示されている。第3段落では年代と普及率がそれぞれ整理され、それをふまえて「快適」に過ごせるようになっているとしている。「説明ステージ」としては、「夏などの暑い時期」について不便であった状況をふまえるなど、過去の年代における社会的な文脈をふまえており、「快適に便利に過ごせるようになった」という考えをとりつつ、過去の状況との比較による視点から意見述べるが行われている。

4-2. 学習者B

ワークシート2から見ていくことにする。

ワークシート2

- (1) くらしやすい方向に向かっている。
- (2) 色々な物などが開発され、便利だから。
- (3) 国内の自動車保有台数

※工場数と働く人数は、ちょうどよいかを知って、今ほとんどの人がのっている車の現状

①・自動車をもっている人がふえてくらしが便利になった。

・たくさん持っている人がいるので、売るがわも、もうけれる。

・一九七

②車はふえている。＝昔より便利になった。

※だんだん近所にも増えてきたし、東京などですごい車があるのでくらしやすい方向に向かっている。

③世の中の人に乗っている車が増えてきたから、便利になっていい方向に向かっている

(2) では、「色々な物などが開発され、便利だから」とし、その具体的な例として(3)「国内の自動車保有台数」のグラフを選択している。(3)の①では、「自動車をもっている人がふえてくらしが便利になった」こと、また「売るがわ」の人もよいとしている。増えること→便利として理由を述べている。

ワークシート3

- (1) むかっている
- (2) 車は便利だから、（問題点も有…けれど、これからふつうになおせるもんだい）
- (3) 国内保有台数

①保有数

皆に「こんなけ国内でもっている」ということをいいたいから

②たては年代、黒はバスと帯グラフ

③車の合計台数。最近だと2013年で8085万台

④13年には、金国で8085万台

・自分の家でもいつもつかっているし、逆にないこまるようなそんざい。

ワークシート3では、(2)において「(問題点も有…けれど、これからふつうになおせるもんだい)」とし、問題点の存在に言及している。これは3時間目の話し合いに関係していると考えられる。(3)では、①の保有数に関して「皆

に「こんな^{ママ}け国内でもっている」ということを
 いたいから」とし、グラフが保有台数の多さ
 を示すことを意図したものと理解を示してい
 る。また、②では、「バス」という車種につい
 ての指摘を行っている。草稿の後の交流を通し
 て書かれたワークシート6は次の通りである。

ワークシート6

(2) 私は、車があるから移動が便利ということ
 しか考えていなかったけれど、車の中の機能の
 事も変わってきていることを思いました。車の
 数が増えれば、よりくらしやすくなること
 が分かりました。

(3) 昔や最近の事を比べながら、今の状態をよ
 りくわしく予想したり考えたりしたい。作文の
 ときは「自分の考え」と「よみとれる事」と
 「何で作られたのか」を考えて分かりやすくか
 く。

(2) では、交流を通して、ワークシート2
 で挙げていた「便利」だけではなく、「機能」
 についても言及している。(3) では、「昔や最
 近の事を比べながら、今の状態をよりくわしく
 予想したり考えたり」として、状況をくわしく
 考えることについても述べている。

意見文

「社会は、くらしやすい方向に向かっている」

わたしは、日本の社会は、くらしやすい方
 向に向かっていると思います。なぜなら、国
 内の車の数が増えてきて、移動や、荷物のゆ
 そうが便利になってきたからです。

上のグラフは、国内の自動車保有数を示し
 たものです。このグラフは、国内の人に保有
 台数を知って理解してもらいたいという目的
 で作られたと考えます。このグラフのためは、
 年代で、色は、それぞれの車の種類を表して
 います。これを見ると、台数が増えてきてい
 ることが分かります。千九百七十年と二千十
 四年を比べてみると、あきらかに、二千十四
 年の八千八十五万台が多いことが分かります。
 ということは、世の中は車が増えてきて昔よ
 り、便利になってきたと考えられます。私の
 住んでいる地いきでも、最近たくさん車が増

えてきています。移動する時には、必ずかか
 せないそん在です。

このように、車が増え、便利になってきて
 いるといえるでしょう。だから、日本の社
 会は、くらしやすい方向に向かっていると
 思います。

<参考>国内保有車両数 (国土交通省) 二千十
 四

3つの段落にまとめているが、基本的にはモ
 デルの文章に沿った記述である。「解釈ステ
 ージ」としては、第1段落では「くらしやすい方
 向に向かっている」との方向性が示され、理由
 として「移動」ならびに「荷物の輸送」という
 観点を提示している。それに関係した第2段落
 では、「車の種類」についてグラフが示してい
 ることを説明している。自動車の機能と種類に
 ついての観点をふまえて、「車が増え、便利に
 なってきている」との根拠を示している。「説
 明ステージ」としては、基本的には「わたし」
 を自動車による移動や輸送が行われている社会
 の一員の立場から考えを提示している。

5. 成果と課題

グラフや表の特徴や単位、情報の読み取りと
 ともに、それを日常生活とのつながりから検討
 する活動を通して、グラフや表の背景となる社
 会的文脈をふまえた読み取りがなされていた。
 意見文を書く際に選択の対象となる事柄を出し
 合い検討する機会となっていることが認められ
 る。また、それが意見の根拠となる見方、社会
 的文脈の具体的な認識につながっている点が認
 められる。

今後の課題としては、グラフや表の読み取り
 に基づく情報の選択が、意見文を書くことの学
 習にとってどのような位置づけとなっているの
 かについての検討を行う必要がある。「図表の
 読み取り」が具体的な言語表現としてどのよう
 に引用されるのかという問題である。この点に
 ついて、図表の読み取り、ならびに草稿に基づ
 く交流のやりとりの分析を通して、別稿におい
 て論じたい。また、モデルに沿った文章を書く
 場合、図表の検討を通した読み取りが十分に反

映されにくくなる。モデルとなる文章の分析的な検討を通して、図表を読み取るという学習の展開も必要と考えられ、これは実践における課題である。

参考文献

- 朝日新聞生活文化編集部 編 (2015)『朝日ジュニア学習年鑑』朝日新聞出版
- 奥泉香 (2012)「視覚化する書記テキストの学習—批判的談話分析とデザイン概念を援用して—」『国語科教育』72, pp.25-32.
- 小林一貴 (2014)「談話実践としての書くことにおける「状況性」と「分散性」」『国語科教育』75, pp.48-55.
- フェアクロー, N. (貫井孝典 監訳) (2008)『言語とパワー』大阪教育図書
- Fairclough, N. (2001) *Language and Power*, London: Longman.
- Fairclough, N. (2010) *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*, New Jersey: Pearson PTR Interactive.
- 松木啓子 (2007)「アカデミックライティングの社会記号論：知識構築のディスコースと言語イデオロギー」『言語文化』9-4, pp.635-670.